

厚化粧のモーツァルト

ー カラヤン/ベルリンフィル管楽器奏者の協奏曲と
カザルス/マールボロ音楽祭の交響曲 ー

正直なところ、世上に蔓延するピリオド楽器による「復古的」を標榜した演奏には、あまり食指が動きません。またロココ趣味丸出しの小綺麗な演奏も、出来れば願い下げといたしたいです。今日は、敢えて大編成オーケストラによるモダンな演奏をお聴きいただきます。

各々の演奏は、同じ「厚化粧」でも、高級クラブのママと歌舞伎役者の女形ほどの違いがあるでしょうか。でも、モーツァルトの音楽には、この位のやりたい放題を優に包容する力があります。

幕間にはお口直し？に、実に清冽なハーモニーをお楽しみ下さい。

【前半】

1. モーツァルト：オーボエ協奏曲ハ長調 K.314 (K⁶.285d)

後のフルート協奏曲第2番ニ長調 K.314 は、この曲をモーツァルト自身が編曲したもの。注文者のフェルディナンド・ドシャンは、2曲のフルート協奏曲を依頼していたのですが、1曲が旧作の編曲であったため、当初約束した作曲料を半額しか支払わなかったと記録されています(1778年2月14日付の父親宛書簡)。

2. モーツァルト：交響曲第35番ニ長調 K.385「ハフナー」

1782年半ば、幼少からの友人であったジークムント・ハフナーの叙爵祝いのために作曲が企図されましたが、仕事は大いに遅れて結局は祝典パーティには間に合わなかったようです。この時期には珍しい、フルート2、クラリネット2を含むフルオーケストラ編成となっています。

【幕間】

3. コレツリ：合奏協奏曲 作品6 第1番ニ長調

一般的には第6番ト短調「クリスマス協奏曲」の方がポピュラーですが、今

回は敢えてこちらをお聴きいただきます。

【後半】

4. モーツァルト：オーボエ、クラリネット、ファゴットとホルンのための協奏交響曲変ホ長調 K⁶.Anh.C14.01（偽作？）

人気曲ではありますが、出所の怪しい曲でもあり、評価の分かれるところです。

1778年、パリ滞在中に同地の興行主ル・グロの依頼により着手され、一旦は「フルート、オーボエ、ファゴットとホルンのための協奏交響曲 K.297B (K.Anh.9)」として完成しました。しかし種々の事情で初演は遅れに遅れ、拳劔ル・グロは楽譜を紛失したと主張し、事態は「藪の中」となりました。

その後19世紀半ばに、音楽史家オットー・ヤーンの遺品より編曲譜（何故か独奏楽器の一部が変更された）が発見され「オーボエ、クラリネット、ファゴットとホルンのための協奏交響曲 K³297bとして復活しました。

しかしながら、近年の研究では ①クラリネットの扱いが洗練され、作曲者晩年以降のスタイル ②3つの楽章全てが同一の調性なのはモーツァルトとしては異例、というような点が疑問視され、「偽作の疑いのある」または「由来の判然としない」作品として取り扱われています。

一方、アメリカのピアニスト・研究家のロバート・D・レヴィンは、1988年、コンピュータを使って失われた K.Anh.9 の当初独奏パートを復元したと称して出版 (K.297B) し、それ以前にネヴィル・マリナーにより録音も行われていました (1983、Phillips)。この「レヴィン版」による録音には賛否両論（好き嫌い？）があったと記憶しています。

ところで、数々の問題がありながらも、この魅力的な曲がモーツァルトの作品でないとしたら「一体誰が作曲したのだ？」という謎は依然として残されたままです。

5. モーツァルト：交響曲第40番ト短調 K.550

モーツァルトの作品の中でも、おそらく一二を争う人気曲。「疾走する悲しさ」等、文学的表現にも事欠きませんが、ここは純音楽的に鑑賞することといたしましょう。

なお、初演後に作曲者自身により改訂が行われ、オーケストラにクラリネットが追加されました（旧版のオーボエのパートが相当部分移管されています）。

親友（悪友？）のクラリネット奏者アントン・シュタードラーにソロの見せ場を作るため、との説がありますが如何なものでしょうか？ただ今回お聴きいただく演奏はクラリネットを含まない旧版によるものです。こちらの方が枯淡な音色で良いと評価される方もいらっしゃると思います。

【演奏者等情報】

1. & 4. ヘルベルト・フォン・カラヤン/ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

1. ローター・コッホ (Ob)

4. カール・スタインス (Ob)、ヘルベルト・ステール (Cl)、マンフレッド・ブラウン (Fg) ノルベルト・ハウプトマン (Hr)

(EMI EAA-90005-7 Rec.1971.08.17-23 Switzerland)

1970年代初頭のベルリン・フィルメンバーの優秀さは、今更申し上げるまでもありません。一方、カラヤンのモーツァルトに対するアプローチは「兎に角レガートを強調する」ことに徹しているようで、楽譜のスタッカートの指示もほぼ無視して、ひたすら柔らかく豪華な響で流れています。

3. ボフダン・ヴァンハル/スロヴァキア室内合奏団

(Victor VIC-2022 Rec.1975 Czechoslovakia)

このLPが出回るまでは、我国では全く無名な存在でしたが、一聴して姿勢を正した記憶があります。現在の活動状況は今一つ地味なものようです。

2. & 5. パブロ・カザルス/マールボロ音楽祭管弦楽団

(CBS-SONY SONC 10375-77 Rec.1959-1968 USA)

チェリストとしてのカザルスの全盛期は、おそらく1930年代だったのではないのでしょうか。1940年代に、スペイン・フランコ政権との軋轢で仏プラド（その後は米プエルトリコ）に移住した後にはオーケストラ指揮に傾注したのは、むしろ賢明であったと考えています。良い意味での「アマチュアみたいなひたむきさ」「無骨さ」が、たまらない魅力を醸し出しています。

巷間ではマールボロ祝祭管弦楽団の評価は「素人臭い」「寄せ集め」と、あまり芳しいものではありません。しかし同時期にカザルスが関わっていたプエルトリコ音楽祭管弦楽団のメンバーには、ジュリアード弦楽四重奏団員や、シカ

ゴ交響楽団、クリーブランド管弦楽団、フィラデルフィア管弦楽団の首席奏者等、錚々たるメンバーが参加していたという記録があります。マールボロ祝祭管弦楽団の方も舐めてかかると小股をすくわれるような気がいたします。

【参考文献】

使用各 LP と GRAND SLAM RECORD GS-2097 のライナーノート
モーツァルト全集（付録解説） 海老沢敏他 小学館 1990-1993
モーツァルト タイム・カプセルの旅 石井宏 音楽之友社 1992
モーツァルトのシンフォニーII ニール・ザスロー 東京書籍 2003
モーツァルト全作品事典 ニール・ザスロー 音楽之友社 2006

以上、大野真澄